



なんだかはっきりしない嫌な夢にうなされて目が覚めた。
最悪な気分で、何の気なしに傍らの目覚まし時計に目をやる。
緑色に光るデジタル数字は、とんでもない時間を指していた。

げ、やばい。仕事に遅れる！！

あたしはメイクもそこそこに、コンタクトを入れることもできず、いまいち度のあっていない眼鏡をひっかけると、アパートを飛び出した。

不覚、不覚。入社して3年、いままで遅刻と欠勤しないことだけが唯一の取り柄だったのに。
なんだかこめかみの奥に鈍い痛みを感じて、余計に憂鬱になる。

きっとあれが原因だ。

昨日会社で新製品の.....メロンだかマスカットだかで作ったって言うグリーンのワイン。

それを試飲にと、あたしのいる課で全員に振舞ってくれたんだけど、おいしかったし、タダ酒だと思って、つい飲みすぎちゃったのが敗因だ。

ヒールを履いて猛ダッシュのかいあって、出発寸前の電車に飛び乗ることができた。

何とかまにあいそうだとほっとして眼を上げると、わりと近い位置に同僚のきいちゃんが立っている。

「おはよ。きいちゃんも寝坊？」

けれど、きいちゃんはあたしが声をかけたのに気づかないのか、ぼんやりと宙に視線を漂わせている。

空振りしてしまった挨拶が恥ずかしい。

意地でもなんか返事してもらいたい。

次の駅に着き、乗降で人の波に流れが生じたのに便乗して、きいちゃんに手が届くくらいの距離まで近づいた。

「きいちゃん、おはようってば」

ビクリと振り向いたきいちゃんは、改めて見るとメイクもしてないし、服も昨日と同じものを着ている。

ははあ。彼氏の部屋に急なお泊りでもありましたか。

オロオロとキョドっているのはそのせいか。

あれ？でも、きいちゃんの彼氏くんだって私らと同じ会社の社員なんだから、入社するなら一緒に出てあげればいいのに。

いや、事実いままでも何度かそうやって、朝っぱらからラブラブオーラの二人に同じ電車を出くわしたことはあったんだ。

「きいちゃん、ナカ君は？今日はお休みなの？」

きいちゃんはナカ君の名に反応したのか、びくっと、傍目にもはっきりわかるくらい飛び上がった。

そして、何か言いたげに二、三度唇を開きかけたものの、結局、何も言わず、また向こうを向

いてしまった。あらら。やっぱりナカ君となんかあったのか。

そのとき、ふいにきいちゃんの髪に緑の糸くずがついているのが眼に入り、とってあげようと無意識に手を伸ばした瞬間。

「さわらないで！！」

叫ぶように怒鳴られ、車両内の視線が一斉にあたしたちに集中した。

おいおい、私はチカンですか。

かなり納得いかないものはあったけれど、これ以上電車の中でごたごたしても仕方がないと思ったあたし、小さく「ごめん」とあやまり、二人、気まずい空気のまま会社へ向かった。

きいちゃん、いったいどうしちゃったんだろう。いつもはよく喋る明るい子なのになあ。

会社の更衣室で制服に着替えながらも、視線はいつの間にか彼女へと向いてしまう。

洗面台でコンタクトを入れ、あらためてかたわらでのろのろと着替えをしていたきいちゃんの異様さに気づく。

明るい茶色に染めたセミロングの髪は、ブラシをかけていないどころか手でかき回されたようにぐちゃぐちゃにほつれて、ノーメイクの目元には濃い隈が浮いていた。

当然顔色もよくない。

きれい好きはずの彼女のブラウスやスカートには、暗緑色の染みが点々と散っている。

何の染みだろう？何か飛び散ったような……。

その染みにあたしは、この前見たホラー映画でゾンビを返り討ちにしたヒロインの服についていた返り血を連想した。

おまけにあの糸くず。まだついてる。うう。気になる。

いいよね、これくらい。ただでさえ、今日のきいちゃんは身だしなみがひどいことになっているんだもの、これも武士の情けよ。

彼女がこちらに全く意識をむけていないのをいいことに、さっと手を伸ばし糸くずをつまみ取る！

が、糸くずは意外なほど長く、何十センチにもわたって繰り出され……その糸にそってきいちゃんの背中がジッパーが開くように裂けると、中からドロツとした緑色の液体が噴き出した。

ゆっくりと膝をつき、そのまま前へ倒れるきいちゃん。

きいちゃんの裂けた背中からは緑色の芋虫みたいな生き物がわらわらと這い出してきた。

あまりのシュールななりゆきに、更衣室にいた全員が悲鳴をあげるのも忘れてぼうっと突っ立っていると

「あなたたち！早くしなさい、朝礼が始まっちゃうじゃ……！？」

私たちの課のお局が更衣室のドアを開けた。

お局はしかし、室内の惨状を眼にすると、その先の台詞を続ける代わりに、ものすごい悲鳴を

あげて廊下の向こうへ駆け出していった。

あたしは見てしまった。

回れ右して逃げ去ってゆくお局の襟足にもきいちゃんと同じ鮮やかな緑色の糸くずが覗いているのを。

今日はもう、仕事にならんだろな……。

理解を超える事態に麻痺した頭で、妙に冷静にそう考えると、あたしは更衣室を出る。

課のオフィスまでゆくと、お局から騒ぎを聞きつけたらしい同僚たちがざわざわしていた。

よく見れば課内のみんな、頭や首のどこかしらにあの緑色の糸くずをつけている。

一見、ついていないように見える人たちは、髪の中や服に隠れているのかもしれない。

「先輩、大丈夫ですか～？」

後輩のいっちゃんが、泣きそうな顔で駆け寄ってきた。ああ、この子にも耳の後ろから糸が覗いてる……。

「あ、先輩。髪にゴミが」

いっちゃんがあたしに手を伸ばす。

「さわらないで！！」

あたしは絶叫していた。

(完)